

ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』 — ホモソーシャルな男たちの性的幻想 —*

Sexual Fantasy of Homosocial Men in Bram Stoker's *Dracula*

宮地 信弘

(Nobuhiro Miyachi)

序

Bram Stoker (1847-1912) の侵略小説¹『ドラキュラ』(*Dracula*, 1897) は、イギリス征服を企図して迷信渦巻くトランシルヴァニア (森の彼方の国) から 19 世紀末のイギリスに侵入してきた不死者ドラキュラ伯爵が、強い連帯感で結ばれた男たちによって阻止され、その目的を果たせずにイギリスから放逐されるという物語である。この短い要約からもわかるように、男たちのホモソーシャルな絆が前景化されたきわめて男根中心的 (phallogentric) な小説である。しかしながら、イギリスにおいてドラキュラを迎え撃ち、ついにはトランシルヴァニアまで追跡していったその息の根を止める男たちの中心には Mina Harker という女性がいる。彼女自身ドラキュラの毒牙にかかりながらも男たちを支え、ドラキュラ退治を成功に導いていく。彼女なくしてドラキュラ退治はなしえないものであった。この小論では、ドラキュラの犠牲となったミナ・ハーカーが男たちの精神的支柱としてどのように男たちのハビトゥス (規範システム) の中に位置づけられていくか、そしてそのときどのような力が作用しているかについて考えていきたい。

ホモソーシャルな男たちは、一方で家父長制維持のために異性愛的要素とそれに伴う女性崇拜を必要とするが、他方でそれと裏腹に無意識の次元では女性

に対して激しい嫌悪と恐怖を抱いている。すなわち、彼らは女の中に潜むセクシュアリティの目覚めを半ば欲望しつつ恐れているのである。同時にホモソーシャルな男性集団は、その内部に隠し持った男性同性愛への衝動ゆえにたえず内部崩壊の危機にも晒されている²。したがって、家父長制の維持のためには、彼らは女の内部に潜んでいる過剰のセクシュアリティを夢想し欲望しつつも、最終的にはそれを管理し、押さえ込むことを余儀なくされる。その一方で、ホモセクシュアルへと傾斜していく個人的な性的傾向を禁圧し、それをより公的な社会的次元へと昇華していくことが必然的に求められる。でなければ、家父長制社会は内部から解体していきかねないからである。自らの男性性を支える家父長制の維持、何よりもそれが彼らの存在の拠り所であり、行動の大義となる。

そのようなエートスを持つ彼らにとって、どこにも知れぬ外部から侵入してきて、男女の別なく過剰のセクシュアリティを発動させていくドラキュラは家父長制を根本から覆しかねない脅威として映る。外部からの侵入者とは言ったが、鏡に映ることのないドラキュラに外的な実体などあるはずもなく、「不死者」(Undead) という異形の者に投影されたホモソーシャルな男たち自身の無意識に潜む性的幻想とホモセクシュアリティへの恐怖（すなわちホモフォビア）こそがドラキュラの実体³であるととらえた方が適切であろう。

過剰のセクシュアリティ

性というものをあからさまに描くことが、少なくとも表面的には、社会の良識のコードに反するとされたヴィクトリア朝において、『ドラキュラ』というゴシック小説は危険なテキストであったにちがいない。抑圧された性のリビドーが今にもテキストの表面を喰い破って奔出し、社会の性規範を転覆させかねない場面が潜んでいるからである。たとえば、ドラキュラ城に幽閉されたイギリス人の事務弁理士 Jonathan Harker が夢とも現実ともつかない状態で三人の吸血鬼女に襲われる場面（第3章）がそうであるし、また、ドラキュラに襲

われて自らも「不死者」すなわちヴァンパイアとなった Lucy Westenra がその白い胸に婚約者の Arthur Holmwood から杭を打ち込まれる場面（第 16 章）も同様の場面である。あるいは、ジョナサンの妻ミナ・ハーカーが夫と眠る寝室でドラキュラに襲われる場面（21 章）、Van Helsing 教授がドラキュラ城に乗り込む直前、吸血鬼女の誘惑に屈しそうになる場面（27 章）などもまた同様である。いずれの場面も過剰の性的欲望に目覚めた女に対する男たちの不安と欲望が濃密に表出された場面で、生々しい視覚的イメージに富んだその描写は悪夢のような雰囲気さえ漂わせている。この作品が性規範の厳しかった時代に生きた男性の性的幻想 —— Belford の言う「ヴィクトリア朝の男性が抱いた最大の悪夢、そして最も大事にしているファンタジー、すなわち、性的に攻撃的な女に変身した清純な女性との結合」⁴ —— によって染めあげられたテキストであることを、そうした場面ははしなくも暴露している。おそらく当時の読者は、現代の読者同様、眉をひそめながらもその官能性に充填された描写に圧倒されて、戦慄を覚えつつ、つい引き込まれていったにちがいないだろうが、その実、それは自らの内に潜む性的ファンタジーに密かに酔い痴れていただけのことにすぎない。

男たちの性的幻想を何よりもあからさまに示すのは、ドラキュラの犠牲となったルーシーの白い胸に婚約者のアーサーが全身の力を込めて杭を打ち込むときに迸り出る大量の血であろう。吸血鬼についての該博な知識を持つオランダ人学者ヴァン・ヘルシング教授は、いち早くルーシーが不死者になったのではと疑いを抱き、かつての教え子で今は友人でもある Seward 医師とともにその事実を確認する。その後、二人はルーシーの婚約者である貴族アーサーとその友人のアメリカ人 Quincey Morris を夜に連れだし、幼児を誘拐して墓に戻る途中のルーシーに目撃させる。アーサーは、彼女の「穢れた、地獄の炎に満ちた目」(Lucy's eyes unclean and full of hell-fire)⁵ と「淫靡な笑い」(a voluptuous smile) (p. 257) を見て、それまで信じようとしなかったルーシーの吸血鬼化を苦しみながらも受け入れる。ヴァン・ヘルシング教授は、穢された女は抹殺する必要がある、そしてそれを行うのは婚約者のアーサーでなけれ

ばならぬとして、翌日一行はルーシーが眠る墓へ行き、アーサーがその胸に杭を打ち込む。

Arthur took the stake and the hammer, and when once his mind was set on action his hands never trembled nor even quivered. Van Helsing opened his missal and began to read, and Quincey and I [i.e. Dr Seward] followed as well as we could. Arthur placed the point over the heart, and as I looked I could see its dint in the white flesh. Then he struck with all his might.

The thing in the coffin writhed; and a hideous, blood-curdling screech came from the opened red lips. The body shook and quivered and twisted in wild contortions; the sharp white teeth champed together till the lips were cut, and the mouth was smeared with a crimson foam. But Arthur never faltered. He looked like a figure of Thor as his untrembling arm rose and fell, driving deeper and deeper the mercy-bearing stake, whilst the blood from the pierced heart welled and spurted up around it. His face was set, and high duty seemed to shine through it; the sight of it gave us courage, so that our voices seemed to ring through the little vault. (p. 262)

北欧神話の雷神トール (Thor) に喩えられたアーサーが、決意してためらうことなく、露骨な phallic symbol である杭を深く突き刺せば突き刺すほど、ルーシーの血は激しくその胸から「溢れ出て」(welled)、勢いよくあたりに「飛び散る」(spurted)。苦痛に体をよじり、口は鮮血にまみれ、血も凍るような悲鳴を上げるルーシーの体からほとぼしる大量の血は彼女の底知れないセクシュアリティを表象するものであり、女はここでは、確実に死に繋ぎ止めない限り馴致することが不可能なセクシュアリティと結びつけられ、男性社会を脅かす存在として捉えられる。であればこそ、女という被抑圧者は男たちにとって管理と処罰の対象となるのである。

しかし、あたりに飛び散るルーシーの血は、もとをただせば彼女を救おうと輸血によって繰り返し注ぎ込まれた彼ら4人の男たち自身のものである。この物語において、血が精液の *metonymy* (換喩表現) であることは多くの批評家の指摘するところである (引用文中の “welled” や “spurted” という語は何よりも男性の射精を連想させる語である)。とすれば、飛び散るルーシーの血はセクシュアリティに目覚める女を恐れつつ密かに望む男たちの欲望の記号にすぎず、男たちによる集団陵辱とも見まごうこのルーシー殺害の場面は、裏をかえせば、眠る女に投影された男たちの性的ファンタジーのすさまじさを物語る場面⁶でもあるとすることができる。

アーサーがルーシーの胸に杭を打ち込むのは予定されていた二人の結婚式の翌日のことである。ということは、この杭を打ち込むという行為は初めて行う夫婦の交わりの代理行為であり、アーサーはこうした形で一日遅れの初夜を迎えることになる。アーサーは、妻となるはずだった女をその破壊的なセクシュアリティから解放してやることで、彼女の魂の純血を守り⁷、妻を完全に支配する夫として望ましい婚姻関係を打ち立て、同時に真にたくましい男として男性社会に迎え入れられることになるのである。アーサーがルーシーの胸に杭を打ち込むときに彼のたくましが強調されるのも、女を管理下におく彼の男性性の証明に他ならない。女のセクシュアリティを管理することは、ホモソーシャルな男たちの精神的高貴さを守るために必要な男性の「重要な義務」(a grave duty) (p. 249) であり、若い男たち全員がルーシーに求婚した中で、彼女が選んだアーサーに、ヴァン・ヘルシング教授が杭打ちを実行させるのは、女のセクシュアリティの恐怖を身をもって経験させ、管理の必要性を認識させるための、いわば一種の体験学習なのである。また、それは彼をホモソーシャルな男性集団に受け入れるためのイニシエーションの儀式でもある。

性の侵犯者ドラキュラ

ルーシー抹殺の場面にもまして、男性の性的幻想が露骨に透けて見える最も

スキャンダラスな場面は、ドラキュラと対決する男たちを母性というヴィクトリア朝的特質で支えるミナ・ハーカーがドラキュラの犠牲となる場面である。死の直前の **Renfield** —— スウォード医師の精神病院に収監されている「生命嗜食の妄想に憑かれた狂人」(a zoophagous maniac) —— から今この瞬間にもミナにドラキュラの魔の手が伸びているかもしれないこと聞き出した4人の男たち(ヴァン・ヘルシング教授、スウォード医師、アーサー・ホルムウッド、そしてクインシー・モリス)はあわててミナの寝室に駆けつける。ドアを押し破って中に踏み込んだ瞬間、男たちは月光に照らし出されたドラキュラとミナが、眠りこけた夫ジョナサンのそばで、ある「行為」のさなかにあるところを目撃する。

The moonlight was so bright that through the thick yellow blind the room was light enough to see. On the bed beside the window lay Jonathan Harker, his face flushed and breathing heavily as though in a stupor. Kneeling on the near edge of the bed facing outwards was the white-clad figure of his wife. By her side stood a tall, thin man, clad in black. His face was turned from us, but the instant we saw all recognised the Count — in every way, even to the scar on his forehead. With his hand he held both Mrs. Harker's hands, keeping them away with her arms at full tension; his right hand gripped her by the back of the neck, forcing her face down on his bosom. Her white nightdress was smeared with blood, and a thin stream trickled down the man's bare breast which was shown by his torn-open dress. The attitude of the two had a terrible resemblance to a child forcing a kitten's nose into a saucer of milk to compel it to drink. As we burst into the room, the Count turned his face, and the hellish look that I had heard described seemed to leap into it. His eyes flamed red with devilish passion; the great nostrils of the white aquiline nose opened wide and quivered at

the edge; and the white sharp teeth, behind the full lips of the blood-dripping mouth, clamped together like those of a wild beast. (pp. 336-7)

白いミナと黒服のドラキュラの絡み合う姿影がブラインド越しに差し込む月光に浮かび上がるこの光景は、明暗対比（キアロスクーロ）が際立つ見事なゴシック的情景で、一読して読者の脳裏に忘れがたい印象を残す⁸。

寝室でのショッキングな光景を目撃したスウォード医師は、上記引用の前の部分で「首の後ろの髪が総毛立ち、心臓が止まるかと思われた」と記しているが、この場面は彼にとってそれほどまでに衝撃的であった。他の男たちにとってもそうであったろう（ジョナサンは、眠りから覚めて、この話を聞くと一夜にして白髪となる）。男たちにとって衝撃的であったのは、初めてドラキュラの姿を目のあたりにしたということ以上に、何よりもミナとドラキュラの行為が喚起する性的な含みに対してであったことは間違いない。ドラキュラは左手でミナの両手をつかんで伸ばし、右手で彼女の首根っこを押さえて、はだけた胸から滴る血を吸わせようとする。この行為は直截にオーラル・セックスを連想させずにはおかない。口元から涎のように血を垂らしながら大きく膨らんだ鼻孔を痙攣させているドラキュラが性的興奮の絶頂にあるのは言うまでもない（そうした状況を描くこの場面は勢いポルノグラフィーすれすれの描写とならざるをえない）。この“enforced fellation”（「強制されたフェラチオ」）⁹の現場を目にして、男たちが悟るのは、ドラキュラとは何よりも性の侵犯者であり、侵略者ドラキュラの征服とは肉体的な直接交渉による性的支配であるということである。すなわち、性行為の換喩表現である吸血行為によってドラキュラは犠牲者の内にセクシュアリティを目覚めさせ、性的放縦の怪物に変えていく破壊的な力を秘めた存在であるということである。

ドラキュラがミナを襲ったのは、一つにはミナの立案で自分の侵略計画を妨害した男たちに対する報復であった。その報復手段としてドラキュラがとった方法はミナを男たちから横取りし、彼女をセクシュアリティの内に支配し、自

分に従う花嫁に仕立て上げることであった。「お前は、あいつらにかわいがられたお前は、いまやわしにとって、我が肉の肉、我が血の血、我が肉親の中の肉親なのだ」(And you, their best beloved one, are now to me, flesh of my flesh; blood of my blood; kin of my kin) (p. 343) とドラキュラは言う。この言葉は、言うまでもなく、アダムがその妻イヴに言うときの言葉（「創世記」第2章23節-24節）をもとにして、血に憑かれたドラキュラにふさわしい一句「我が血の血」(blood of my blood) をさり気なく挿入した表現である。まさに「悪魔は神に似る」(Diabolus simius Dei) の諺通り、聖書のテクストを文言はそのままに、しかし、意味合いは脱構築的に反転させた、ドラキュラの見事な悪魔的パロディである。この婚姻宣言によって、ミナは今後妻が夫に従うように、あるいは奴隷が主人に従うように、ドラキュラという夫に服従する女にならざるをえなくなる。

ここではジョナサンは明らかに寝取られ夫でしかないが、ミナがすでに男たち全員から信頼され、彼女自身あたかも彼ら全員の共通の妻であるかのようにかいがいしく仕えていたことを考慮すれば、「寝取られた」というのは男たち全員に対して言えることである。ミナを守りきれなかった無能な男たちを尻目に、性という暴力で他人の妻を奪い、易々と自分の支配下におくドラキュラは彼らよりもはるかに強い男なのである。ドラキュラはここでは全権能を有している超男性的な存在として表象される。それもまた、異形の者に投影された男たちの無意識に潜む（おそらくは究極の）性的幻想であるだろう¹⁰。

しかし、ドラキュラの報復は男たちだけに向けられているのではない。「まず今はお前の行ったことに対して罰を受けるのだ」(as yet you are to be punished for what you have done.) (p. 343) とミナに向かって言うように、ドラキュラがミナを襲ったのは、何よりもまず「頭脳 / 知恵」(brain / wits) をめぐらせて自分に刃向かったことに対するミナへの懲罰であった。19世紀後半、前世紀の観相学 (physiognomy) や骨相学 (phrenology) に起源を持つ自然人類学が男女の脳を計測し、科学的偽装を施して「女の脳は最も重いものでも、最も軽い男性の脳に劣る」、「女性の脳は男性の脳よりむしろゴリラの脳に

近い」¹¹ といったまことしやかな性科学 (sexual science / sexology) の言説が流布していた。そうした中であって、ミナの行為はそれに反する行為、すなわち、女性の身でありながら、男まさりの頭脳を使って行った出すぎた真似であり、ドラキュラによる陵辱はそれに対する男の側から加えられた懲罰でもあった。とすれば、ドラキュラはヴィクトリア朝の性規範の破壊者であると同時に、男と女の差異化というジェンダー・イデオロギーを暴力的に実現していく力強い男性でもあるということになる。

もしドラキュラが襲うのが女だけであるならば、少なくともイデオロギー的には、男たちにとってドラキュラはそれほど恐ろしい存在ではなくなる。なぜなら、それは伝統的なジェンダー・コードを破壊するものではなく、超男性として家父長制イデオロギーの強化に貢献することもありうるからである。しかしドラキュラが襲うのは女ばかりとは限らない。むしろ彼が本当に求めているのは男の血らしく思われる。たとえば、よく言及される箇所であるが、ジョナサンがドラキュラ城で3人の吸血鬼女に襲われ、その中の一人金髪の吸血鬼女がジョナサンの喉に歯をたてようとするちょうどそのとき、ドラキュラ伯爵は彼女をジョナサンから引き離して、「この男はわしのものだ」(This man belongs to me.) (p. 53) と言う¹²。また、それから数日後のことだが、ジョナサンを城に幽閉することに成功したドラキュラがジョナサンの部屋を出て行くとき、彼はジョナサンに投げキスをするという、あからさまなホモセクシュアルの身振りを見せる¹³。ドラキュラが危険なのは、その無差別な性的侵犯を通して、本能的なあるいは多型倒錯的なセクシュアリティを目覚めさせ、女を性的怪物に変えていくだけでなく、ホモソーシャルな男たちの内に潜む男性同性愛への衝動をも現実化する契機が潜んでいるからである。そこに男たちの不安(と密かな願望)がある。

ミナとテクノロジー

ミナは、ドラキュラの犠牲となって穢されたにもかかわらず、ルーシーとは

違って杭を打ち込まれて処罰されることはない。逆に男たちの絆を強める要として彼らの中心を占めていく。それはなぜか。

ミナという女を特徴づける二つの大きな特質は、夫に献身的に尽くし、男たち全員に母性的愛情をもって向かう良妻賢母的特質と、それと矛盾するような男性的言説への強い憧れである。彼女は、一見伝統的なく家庭の天使>タイプの女性に見えながら、決して単純なそれではない。彼女は、当時台頭してきつつあったいわゆる<新しい女>に批判的であり、その道德意識においては夫に献身的に尽くすことを是とする女性である。その一方で、“career-making”への強い意志を持ち、行動においては<新しい女>と思えるほどの行動力を見せる。もともとジャーナリズムの世界に憧れをもっていた彼女は時代の新しい発明品・テクノロジーに強い関心を示す。彼女はスウォード医師が日記代わりに用いているフォノグラフ（蠟管蓄音機）を見て、非常な興味を示し¹⁴、すぐにその使い方をマスターする。スウォード医師の声と知（すなわち、男性というジェンダーと結びついた権力）を録音した円筒形の記録媒体は、そのファロスの形態もさることながら、男性の知を記録しているというまきによって、男根中心的な権力を表象する強力な記号である。そのファロスの記録媒体¹⁵を読みとく術をマスターすることで、彼女は男たちの知の領域に侵入する手段を手に入れる。彼女はまたタイプライターをペン代わりに用いて、ジョナサンの手記を数枚の複写とともに打ち出し、ドラキュラ退治の計画立案に大きく貢献する。彼女はタイプ打ちがあたかも自分の職分でもあるかのように、たえずタイプライターで原稿を打ち、男たちが読むテキストを生み出していく（当時のタイプライターはかなり大型で、女性の力で運ぶには重すぎるにも関わらず、彼女はどこへ行くにもタイプライターを持参する。彼女がドラキュラに襲われてからはクインシーがタイプライターの運び役をつとめる）。

タイプライターとフォノグラフ。文字言語であれ、音声言語であれ、いずれも<言葉>の記録・保存・再現、つまりは言説に関わるシニフィアンであり、それを通してテキストを生成していくテクノロジーである。ミナはヴィクトリア朝時代におけるそうした先進的なテクノロジーを駆使することでテキスト

生成に全面的に関わってくる。彼女は入手可能な男たちの日記や記録を時間軸に沿って整理し¹⁶、合理的な言説の内にドラキュラの非合理性を解読可能な形に還元し、テキストの内に捕らえていく。そうすることで、彼女は男たちが読むテキストを生成するだけでなく、そのテキストを読む男性たちの行動を統括し、支配していく力を手に入れることになる。

男たちにかいがいしく仕える一方で、ミナはタイプライターでそれぞれの記録を誰もが読むことのできるテキストに織り上げていく。彼女の編んだテキストは男たちの間に知の共有という状態をもたらし、彼女は知の統合者、そして知の「媒介者」(mediator)となる。同時に、彼女はそのテキストの author として、テキストの authority、すなわち、男性の言説世界における権力を獲得していくことになる。そのようにして、ミナは男たち全員に仕える妻という身振りを装い、ヴィクトリア朝社会の家父長制イデオロギーを破壊することなく、と言うよりもむしろそれを巧みに利用して、男性と女性の境界を越えて男たちの言説空間に入り込み、その権力の中枢に食い込んでいこうとする。しかし、それはジェンダー・システムにおける境界侵犯的な行為であり、そこにミナの罪がある。だが、それでもミナが処罰されないのは、同時にミナは、男たちの側からすれば、彼らのホモソーシャル的な結束強化にとっては欠かせない存在だからである。

ミナが侵犯するのはジェンダー・システムの境界だけではない。彼女は自らに内在する母性という特質を通して階級という境界をも無効にする。それを端的に示すのが貴族アーサーのミナ崇拜である。ルーシーの胸に杭を打ち込む際に「雷神」に擬されたアーサーはミナの前では心の弱さをさらけ出し、彼女の母性に包まれてそれまで堪えてきた苦しみに思いっきり浸り、涙を流して、赤ん坊同然にミナの母性に帰依していく。テキサス生まれのアメリカ人クインシー・モリスでさえ、その内心の苦痛をミナに打ち明けようという思いに駆られる。彼女は「心に悩みに苦しむすべての人を慰めることができましたらと思います」

(I wish I could comfort all who suffer from the heart) (p. 278) と言い、いわば、男たち全員のよき妻となる。ルーシーがその装飾的美によってなしとげ

た男性支配をミナは母性によってなしとげる。彼女の母性の前では男たちは全員子どもという次元に還元され、平等化される。ミナは母性を半ば本能的に、そして半ば戦略的に発動させることによって階級という境界を楽々と越境していくのである。ミナはそのセクシュアリティを、ヴィクトリア朝において支配的であった<家庭の天使>や良妻賢母というイデオロギーを隠れ蓑としてなんら規範を逸脱することなく、実に巧妙に発揮していくのである。

聖痕としての穢れ

この小説における男たちはきわめてホモソーシャルな存在である。そうした男たちの世界で強調されるのは友愛であり、連帯・団結・義務・自己犠牲といった社会性の強い価値観である。アーサーがルーシーの胸に杭を打ち込むときも、「高貴な義務」(high duty)が何よりも優先される価値として彼を行動へ向かわせたものであった。しかし、彼らはホモソーシャルなハビトゥス(生息空間)から離れて個人にもどると、とたんに弱さを露呈し、vulnerableな存在となる。たとえば、ジョナサンはドラキュラ城に幽閉されて女性化し、男性性を喪失していく(物語の最後の場面で彼がドラキュラの喉を切り裂くのも失われた男性性の回復に他ならない)。また、アーサーは婚約者ルーシーの死に堪えきれず、よく涙を流す。スウォード医師は自分が直面している状況が現実とは思われず、自分は気が狂っているのではないかと男性的理性の不安定さを露呈していき、アメリカ人クインシー・モリスは作品の中では陰の薄い謎めいた存在だが、義侠心に富んでいて、アーサーの不幸にもらい泣きをする。全員を導いていくヴァン・ヘルシング教授は、いわば若者たちの代理父親だが、その彼にしても、狂気の妻と早死にした息子という個人的な弱みを抱えている。加えて彼には女の病とされたヒステリーの徴候¹⁷がある。いずれもたくましい男たちとはほど遠い存在である。

この脆弱さ(vulnerability)を隠し切れない男たちの姿は19世紀末に意識され始めた男性の弱体化という問題と重なる。男性の弱体化はイギリス国家の

弱体化につながる由々しき問題であった。また、この男たちの弱さはホモセクシュアリティへの密かな接近を暗示するものでもある。それまで「自然に背く罪」として蛇蝎視されてきた男性同性愛¹⁸は、19世紀後半には科学（特に精神医学）のもとに観察・管理されるようになり、子孫を産出しないその不毛性に加えて、男性同性愛に向けられたもう一つの非難は、それ自体が男性の弱体化をもたらすという医学の言説に基づくものであった。ヴァン・ヘルシング教授がときおり見せる男性のヒステリーも当時は男性同性愛を暴露する記号と捉えられることがあった。この小説に出てくる女々しい男たちはいずれもがホモセクシュアリティに傾斜していく契機を秘めた男たちなのである。

ホモソーシャルな絆を維持するためには、その契機の実現は何らかの形で回避されなければならない。それかあらぬか、この小説には、年老いた、しかし強い父たち（すなわち、ドラキュラとヴァン・ヘルシング教授——教授は上述のように内に弱さを隠し持つてはいるが——の二人。面白いことに二人とも外国人である）が若者たちに社会的義務を負わせ、彼らをたくましい男性へ高めようとする意志が見られる。男たちが教授を中心に、その手を取って円陣を組み、ドラキュラ討伐を誓う場面が何よりもそのことを表象している。そのような誓約の場面は都合三回出てくるが、いずれもその中心には老いた父ヴァン・ヘルシング教授がいる。

一度目は全員がスウォード医師の経営する精神病院の一室に集まり、教授がヴァンパイアについて講義をするときである。ミナがドラキュラに襲われる前のことで、出来事の流れを整理してドラキュラ退治の計画立案に貢献した彼女も男たちに混じってこの集団に入っている。

When the Professor had done speaking my husband looked in my eyes, and I [i.e. Mina] in his; there was no need for speaking between us.

“I answer for Mina and myself,” he said.

“Count me in, Professor,” said Mr. Quincey Morris, laconically as usual.

“I am with you,” said Lord Godalming, “for Lucy’s sake, if for no other reason.”

Dr. Seward simply nodded. The Professor stood up and, after laying his golden crucifix on the table, held out his hand on either side. I took his right hand, and Lord Godalming his left; Jonathan held my right with his left and stretched across to Mr. Morris. So as we all took hands our solemn compact was made. I felt my heart icy cold, but it did not occur to me to draw back. We resumed our places, and Dr. Van Helsing went on with a sort of cheerfulness which showed that the serious work had begun. (p. 288)

それぞれがドラキュラ討伐の決意をするこの場面は円卓の騎士を彷彿とさせる。誓いの中心はヴァン・ヘルシング教授であり、教授が示す金の十字架である。誓約の大儀はドラキュラとの戦いに敗れたら、彼らも吸血鬼となり、天国に入ることができず、永遠に呪われるというキリスト教的なものである。ここで表象されるのはパブリックスクール的な「キリスト教的男性性」(Christian manliness) である。

男性の言説空間に侵入することに成功したミナは、まるでヴァン・ヘルシング教授の頭脳でもあるかのように、教授のすぐ左隣に位置する。彼女は「自分の心臓を氷のように冷たく」感じるが、それは、女である自分もこの円卓の騎士の一人に加えられた喜びと緊張感からくるものだろう。しかし、この後、ドラキュラ退治の具体的作戦¹⁹を教授が語る時、ミナはその行動からはずされ、女として一人部屋に閉じこもることを余儀なくされる。教授からその男性的な脳を何度も賞賛されながらも²⁰、ミナは最終的にはこのようにホモソーシャルな男性の生息空間から巧みに排除されていくのである(ミナがドラキュラに襲われるのはその数日後のことである)。

二度目の誓いは、男たちの過失からミナがドラキュラの犠牲になった後、今後は一切ミナに隠しだてはしないことを決め、男たちが作戦行動に移るときで

ある。その際、ミナをドラキュラから守るために教授が彼女の額に聖餅 (the Wafer) を当てると、ミナの額が焼けただけ、聖餅は肉に食い込んで烙印²¹となり、あらためて自分が穢れた身であることを思い知らされてミナは号泣する。ミナが「穢れている、私は穢れている！全能の神様さえ私の穢れた体を避けられる。私は最後の審判の日までこの恥辱の徴を額に負わなければならないのです」(p. 353) と嘆き、ジョナサンがミナを強く抱き、男たちが涙に曇った目を背けるとき、教授は彼女の額の烙印を男たちの結束強化に利用することを思いついて、次のように言う。

“It may be that you may have to bear that mark till God Himself see fit, as He most surely shall, on the Judgment Day to redress all wrongs of the earth and of His children that He has placed thereon. And oh, Madam Mina, my dear, the sign of God’s knowledge of what has been, shall pass away and leave your forehead as pure as the heart we know. For so surely as we live, that scar shall pass away when God sees right to lift the burden that is hard upon us. Till then we bear our Cross, as His Son did in obedience to His Will. It may be that we are chosen instruments of His good pleasure, and that we ascend to His bidding as that other through stripes and shame; through tears and blood; through doubts and fears, and all that makes the difference between God and man.”

There was hope in his words, and comfort; and they made for resignation. Mina and I both felt so, and simultaneously we each took one of the old man’s hands and bent over and kissed it. Then without a word we all knelt down together, and, all holding hands, swore to be true to each other. We men pledged ourselves to raise the veil of sorrow from the head of her whom, each in his own way, we loved; and we prayed for help and guidance in the terrible task which lay before us. (p. 353)

ここでも中心にいて男達を行動へと駆り立てるのはヴァン・ヘルシング教授である。教授は、ミナが受けた恥辱を男たちが背負うべき十字架とし、神の御心に従った神の子イエス・キリストに男たちを例えて、気高いキリスト教的義務の精神を鼓舞する。また、自分たちを「神のよき喜びの選ばれた道具」(chosen instruments of His good pleasure)と呼び、さらに後には「中世の十字軍」(the old knights of the Cross)になぞらえる。ドラキュラに穢されたミナを救う誓いをする二つの誓約の場面で浮かび上がってくるのは、自己犠牲的な高い義務のために自らの欲望を昇華させていく中世の騎士のイメージである。それは個人的次元におけるホモセクシュアリティ発動の抑止力として機能していくことにもなる。穢されたミナはそのとき、男たちの行動を自己犠牲的なものに高めていくためのシンボルに仕立て上げられていき、ホモソーシャルな絆を強化するための道具として利用されていくのである。

ちょうど中世の騎士が個人的な欲望を捨てて、内なる情念を昇華させるために女性という存在をその契機として必要としたように、彼らには個人的な女々しさを男性的なたくましさに昇華する契機となるものが必要である。それに応えるのがミナという女性である。男性の精神を高めていくには官能的なセクシュアリティから遠く離れていなければならない。それゆえミナには、ルーシーが隠し持っていた危険な官能性が与えられることはない。ミナのアガペー的な母性は、男たちにその弱さを露呈させはするが、同時にそれを慰め、彼らの性的幻想を男性的なたくましさに昇華させる機能を果たしていく。そして、ミナがドラキュラに穢されたことは男たちの団結を強めるためには欠かせない要件であった。なぜなら、男たちの判断ミスから引き起こされたミナの穢れは、本来彼らが受けるべきものであり、それを彼女が身代わりとして受けとめたことで、彼女は殉教者的なペルソナを帯びるからである。従ってミナの穢れが意識されればされるほど、ミナは聖化され、聖性の輝きを増すことになる。そのときミナの穢れは聖痕(stigma)と化し、ミナは肉体を超越した男たちの精神(anima、すなわち、Minaのアナグラム)として彼らを導いていく位置を強固にしていく。そのようにミナはその「穢れ」を通してホモソーシャルな男性

集団の中に構造化されていくのである。

しかし、だからといってミナの立場は必ずしも安定しているわけではない。ミナはあくまでも男たちがその性的ファンタジーと男性同性愛への傾向を昇華させ、それらを社会的な連帯へと転じ、強い男性性を獲得するための道具に過ぎない。老いた父ヴァン・ヘルシング教授は彼女が男性の精神的集団を支配していくことを許さない。たとえば、イギリスから逃げ出したドラキュラを追跡するとき、ミナは教授に催眠術をかけられ、一種のテレパシーによって逃亡するドラキュラの動静を探る「媒体」(medium)、単なる「おしゃべり人形」(talking doll) となってしまう(ドラキュラの血と交わったミナは、血の共有を通して不思議な共鳴現象を示し、ドラキュラの思考を探ることができる)。女は異常な性であり、治療を必要とする病人として監禁されなければならない——男性が医者で、女性は患者という伝統的構造の図式がここに浮上してくる。知と権力の所有者である男性医師のもとで眠らされる女性患者という伝統的なジェンダー・コードを身振りする構図に、ミナは自ら屈していく。一時は近代的なテクノロジーを駆使して男たちが読むテキストの author となったミナが、ここでは逆に読まれるテキストとなる。それは彼女の獲得した authority が剥ぎ取られていく瞬間、すなわち、男性の精神的共同体から排除される瞬間でもある。

ミナの立場からすれば、彼女が教授に自分に催眠術をかけてドラキュラの思考を探るよう頼むとき、彼女は自ら authority を放棄し、読まれるテキストと化すことによって男たちの中心に留まろうとする戦略とも言えるだろう。彼女はあえて「読まれる」という受動性に徹することによって、一方では男たちの知の眼差しに潜むジェンダー・システムの権力構造を暴きだし、他方ではそのことは不問に付したまま、男たちの権力的な眼差しに意図的に身をさらすことによってホモソーシャルな男性領域の中心にとどまろうとしているようにも読める。そこに「男性の脳」を持ちながら男性とは成り得ないミナのしたたかさを見てとることができるようにも思う。

ホモソーシャルな共同体は男たちの絆を強化するために構造的に異性的要

素を必要とするが、その異性的要素は常に排除される可能性を秘めている。ミナは男性的言説の操作によって男たちの行動を支えるが、まさにその行き過ぎた境界侵犯ゆえにホモソーシャルな男たちの中にあっては絶えず排除され続けるのである。その排除は、女性を肉体性を欠いた精神的象徴とすることによってなされる。そうすることによって女性の肉体性、そしてその肉体に潜むセクシュアリティの脅威を無効にしていく（象徴とは、すなわち肉体の死である）。セクシュアリティの過剰を暴かれたルーシーが抹殺されて、最終的に魂の純血という無害の領域に封印されたように、ミナもまた男たちの結束を固め、精神を導く象徴という安全圏に監禁される。それもまた管理の（あるいは処罰の）一形式であろう。その背後には弱体化した男性たちの性に対する怯えが潜んでいるように思われる。その恐怖が家父長制イデオロギーの元で生きるホモソーシャルな男たちの性的ファンタジーを肥大化させる。そしてその恐怖から逃れるべく男たちは社会秩序の維持という口実のもとに女たちを管理し、処罰していくのである。

最後に蛇足として一つ付け加える。この物語はドラキュラの死ではなく、アメリカ人クインシー・モリスの死で終わる。ホモフォビアという点から見ると、物語の結末におけるクインシー・モリスの死には興味深いものがある。Franco Morettiはその論文“Towards a Sociology of the Modern Monster”において、この物語を近代における封建的独占資本追放のアレゴリーとして読み、クインシー・モリスをもう一人のドラキュラと捕らえ、彼の死は当時隠れた脅威と映っていたアメリカ独占資本の封じ込めを表象するものとしている。しかし、ストーカーにとって、アメリカはまた『草の葉』の詩人 Walt Whitman とも強く結びついていた。ホイットマンは、男性同性愛を賛美するとも取れるきわどい詩（特に『草の葉』所収の「アダムの子ら」や「カラムス」詩篇など）によって当時のイギリス社会に物議をかもしていた（生涯ホイットマンに崇拜の念を抱き続けたストーカー²²は、トリニティ・コレッジの学生時代にその詩に出会い、そこに歌われた男性同士の絆にすぐに魅了された）。ドラキュラ消滅後、

義侠心に富んだアメリカ人クインシー・モリスは、ホイットマン的な男性同性愛発現の潜在的な危険性として残る。それは、ホモソーシャルな男性集団にとっては一つの内なる脅威であり、その発動を封殺するという意味でもクインシー・モリスは殺されなければならなかったと言えるだろう。

注

* 本論文は、日本英文学会第 78 回大会（2006 年 5 月 20 日－21 日中京大学）において「ホモソーシャルな男たちと穢された女 — 『ドラキュラ』における Mina Harker —」という題目で発表した原稿に加筆修正を施したものである。

1. 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、イギリスが外界の異形の者から侵略されるという主題をもった小説 (invasion novel) がいくつか現れる。たとえば、*Dracula* と同年に発表された H. G. Wells の中篇『宇宙戦争』 (*The War of the Worlds*) は、火星によるロンドン侵略を描いた典型的な侵略小説である。野蛮な外界からの侵略の脅威にさらされるという主題は、未開の蛮地に乗り込んで、そこを舞台に繰り広げられる 19 世紀後半の宝物探求物語（たとえば、Rider Haggard の *She* など）のまさに陰画となっている。侵略小説は、注の 3 にもあるように、社会心理学的には 19 世紀におけるイギリスの帝国主義的な未開地侵略の背後に淀んだ罪の意識と不安を表象するものであろう。

ちなみに、ウェルズの『宇宙戦争』では、興味深いことに人類を滅亡の危機に陥れる火星人は、ドラキュラ伯爵同様、吸血性の生物である。〈吸血〉への恐怖、すなわち、生命の本質である血が穢され、吸い取られることへの恐怖とは、自らの文化的実体の崩壊と原始への退化の不安を如実に物語る身体感覚的表現だろう。また、皮膚によって守られているはずの血が穢されるという恐怖は、眼に見えない細菌という異物による感染恐怖とも重なる。『ドラキュラ』において、ドラキュラが霧となって室内に侵入してくるさまは細菌侵入のアナロジーそのものであるが、さらに、ドラキュラに襲われた者が、ドラキュラの穢れた血に感染して彼と同じく血を求める不死者となるというのも伝染病感染のアナロジーである。

2. Richard Dellamora は、19 世紀後期における中産階級の男性は、男性の権力維持のためにホモソーシャル的な男同士の友情の必要性和ホモセクシュアリティの禁止との間で二重拘束 (double bind) の状態にあったことを指摘している。

Late in the century, masculine privilege was sustained by male friendship within institutions like the public schools, the older universities, the clubs, and the

professions. Because, however, the continuing dominance of bourgeois males also required that they marry and produce offspring, the intensity and sufficiency of male bonding needed to be strictly controlled by homophobic mechanisms. The resulting situation was a double bind in which ‘the most intimate male bonding’ was prescribed at the same time that ‘the remarkably cognate’ homosexuality was proscribed.

(Richard Dellamora, “Homosexual Scandal and Compulsory Heterosexuality in the 1890s,” *Reading Fin de Siècle Fictions*, ed. Lyn Pykett (Longman, 1996), p. 83)

3. Bram Stoker の伝記を書いた Barbara Belford はその冒頭で「脱出不可能な城に孤立して、ジョナサン・ハーカーは自らの分身、彼のもうひとつの自己に直面する」と記している。(Barbara Belford, *Bram Stoker* (New York: Alfred A. Knopf, 1996), p. ix)

また、この物語を「逆植民地化の物語」(a narrative of reverse colonisation) と捕らえる Stephen D. Arata は、「いかなる偽装を施そうとも、この物語は恐怖と罪を表している。恐怖とは〈文明化された〉世界として表象されたものが〈原始の〉力によって植民地化される瀬戸際にいるという恐怖」であり、それはまた〈文化的な罪〉に対する反応であり、「攻撃を仕掛けてくる捕らえがたい他者の中に、英国文化は自ら帝国として行ってきたことが異形の形で映し返されているのを見るのである」と言う。(Stephen D. Arata, “The Occidental Tourist: *Dracula* and the Anxiety of Reverse Colonisation,” *Dracula* (Casebook Series), ed. by Glennis Byron (Macmillan, 1999), pp. 120-1)

4. Barbara Belford, *Bram Stoker* (Alfred A. Knopf, 1996), p. 7.
5. Leonard Wolf (ed.), *The Essential Dracula* (Byron Preiss Visual Publications, 1993), p. 257. 以下本文内の引用はこのテキストによる。引用文にはページ数のみ示す。
6. アーサーが杭を打ち込んだあと、ヴァン・ヘルシング教授とスウォード医師の二人はルーシーの首を切り落とし、切断された頭部の口にニンニクを詰め込んでルーシーをドラキュラの支配から救出する。ルーシー抹殺の場面は、ドラキュラという東欧の非合理的な古代の力によって植民地化されたルーシー・ウエステンラ、すなわち、「西洋の光」(Lucy Westenra) をイギリスの男たちが暴力的に奪還する場面でもあるが、ドラキュラの襲撃は、東欧/過去/野蛮/迷信の侵略が西洋/現在/文明/理性の国イギリスのジェンダー・イデオロギーを危機にさらしていくことを示している。そのように、この小説において侵略という主題は家父長制の下におけるジェンダー・システム破壊の主題と分かちがたく結びついている。
7. ルーシーはもともと夢遊病の持ち主で、ヴァン・ヘルシング教授は、彼女がドラキュラに襲われたのは覚醒時ではなく、夢遊病の時だったので彼女の意志は関与しておらず、

魂の純血は守られると言う。(p. 246)

8. 小説のクライマックスとも言うべきこの場面が舞台上で上演されたとき、観客の中には失神して劇場の外に運び出される者が相次いだという。しかも、そのほとんどが男性だったというから面白い。自分たちの内心に潜む欲望を映し出した光景のあまりの生々しさに恐れをなしたのかもしれない。
9. Christopher Craft, “Kiss Me with Those Red Lips’: Gender and Inversion in Bram Stoker’s *Dracula*,” in *Dracula* (New Casebooks Series), ed. Glennis Byron (New York: Macmillan, 1999), p. 110.
10. 男たちの性的幻想の欲望はこれだけにとどまらない。まるで現場を目撃しただけでは足りないと言っても言わんばかりに、あるいはドラキュラの快樂のおこぼれにあずかろうとしているかのように、事件の直後に、教授はミナに「何が起こったのか、正確に話してくださいませんか」と持ちかけるのである。「穢れている、私は穢れている」(Unclean, unclean!) (p. 339) という嘆きの言葉が示すように、ミナがドラキュラとの血の交わりを性的な「穢れ」、すなわち、道徳的墮落ととらえていることは明らかで、夫をもつ身であれば、それは婚外交渉であり、ヴィクトリア朝の道徳規範からすれば、家庭の守護天使という清純な女性から街の娼婦への失墜を意味している。ドラキュラに穢されたことがミナにとっていかに堪えがたい苦痛であったかは説明を要しないが、教授は、一方で「あなたが苦しむのを私が望んでいないことは神がご存知だ」と同情を見せながらも、他方では「すべてを知ることが必要なのです。というのも、これまで以上に速やかに、そして死に物狂いでことをなさねばならぬのです」と言う。「すべてを知ると」という口実のもと、ミナに襲われたときの告白を迫る。教授は、ドラキュラに襲われたときの女の内的経験、性的に男に支配されたときに起こる女の内なる変化、そのセクシュアリティのありようを男たちの前で告白させたがっているようにも見える。その背後に見え隠れしているのは女のセクシュアリティに対する管理への意志だけでなく、それ以上に男性の窺視症的欲望である(面白いことに、ミナは、教授の頼みにさすがに身震いはするものの、拒否することなく「堂々と」頭を上げて、追体験するかのように話し出す。このあたりにミナのしたたかさが垣間見える)。
11. Cynthia Eagle Russett, *Sexual Science: Victorian Construction of Womanhood* (Harvard U. P., 1989), pp. 35-36.

19世紀後半のヴィクトリア朝は、人類学、生物学、生理学、ダーウインの進化論、心理学等あらゆる科学が結託してヨーロッパ白人男性の優位性を証明するのに血道を上げた時代であった。その矛先は人種の差異だけでなく、男女の性差にも向けられ、女性は、未開人・犯罪者・白痴・子供と同じく、進化に取り残された不完全な人間、あるいは劣る性という言説が広く流布していた。そうした劣等な人種・性は男性知識人にとって絶

えざる不安の種でもあった。

12. この箇所はストーカーの **working note** の段階ですでに記されていて、そこではその後に “I want him” という一文が続いている (Belford, p. 256)。

また、映画等で刷り込まれているのとは違って、ドラキュラは、ルーシーと同じように胸に杭を打ち込まれて最後を迎えるのではなく、ジョナサンに喉を切り裂かれ、クインシー・モリスに狩猟用ナイフを胸に突き刺されて死ぬ。その直後一瞬にして塵となり、消滅してしまう (p. 443)。それは、ドラキュラの胸に杭を打ち込むという身振りの持つ性的連想を微妙に忌避した結果のようにも見える。

13. 想像力をたくましくすれば、ミナが襲われる先ほどの場面で、男たちが踏み込まなかったらその後ドラキュラはジョナサンをも襲っていたと想像することも不可能ではない。さらには、ドラキュラとジョナサンとミナはすでに二人の男が一人の女をめぐり、何らかの淫靡で倒錯的な性的関係がそこに生じていたのかもしれない。

14. 面白いことに、ルーシーもフォノグラフを一台所有している。しかし、彼女がそこに何を吹き込んでいたかはテキストに出てこない。同性のミナあての手紙さえ頻繁に書くことのないルーシーはなぜ、何のためにフォノグラフを持っていたのだろうか。そしてそこには何を記録していたのだろうか。あるいはそれを使って、自分に思いを寄せるスウォード医師の記録したメディアを再生して聞くことなどがあったのだろうか。おそらくルーシーはそれを実用的に使ったことは一度もあるまい。また、その美貌で若い男性たちを虜にしていたのだから使う必要もなかっただろう。ただその男性的言説に関わる機械を所有すること自体が彼女にとっては何らかの意味があったのだろう。男性の性を支配することに憧れながら、結局、彼女はフォノグラフを使いこなせず、とはつまり、男たちの権力的知の世界に介入できず、単なる装飾に終わってしまったところに、破壊的な官能性という形でしかセクシュアリティを発現できない彼女の特質があるのではないだろうか。

15. 文字を生成していくペンやタイプライターは男性の知と欲望が結びついた男根中心主義的な権力を示す記号である。フォノグラフも同様であろう。ラカンはファロスを「言語の機能と欲望の出現が結びつく地点をあらゆる特権的なシニフィアン」と呼ぶ。(竹村和子『フェミニズム』(岩波書店、2000)、p. 56)

16. 時間に対するミナのオブセッションは相当なもので、自ら「列車マニア」(the train fiend) (p. 399) と言うように、すべての汽車の時刻表を暗記している。これはミナに限らず、夫のジョナサンも同様である。この時間への捉われが西洋の合理主義のひとつの記号になっている。それとは対照的に、ドラキュラ城のある東欧世界では近代の時間的秩序が無効化され、次第に時間の観念が溶解していく。ジョナサンはトランシルヴァニ

アへ向かう途中「東に行けば行くほど汽車の時間は不規則になるようだ」(it seems to me that the further East you go the more unpunctual are the trains) (p. 5) と感じる。

17. ヴァン・ヘルシング教授にはずいぶんと悪趣味なところがある。たとえば、ミナが襲われた翌朝、男たちはドラキュラ退治の作戦会議を開き、手順がきまるとドラキュラの先手を打つために今すぐにも出かけようとするジョナサンに対して教授は急ぐ必要はないと言い、その理由として「笑うような顔」で「忘れたのかね。奴は昨夜たっぷりと御馳走を堪能したんだよ。遅くまで眠っているのではないかね？」(p. 351) とつけ加える。もちろんミナの血が吸われたことをさしている。その悪趣味が昂じるとヒステリー症状を呈し、さらに全開になると、完全な道化として振る舞うことになる。「哲学者、形而上学者、そして今日の世界で最も進歩的な科学者の一人」(p. 147) であるヴァン・ヘルシング教授が「女の病い」とされたヒステリーに襲われることは不思議な気もするが、教授のヒステリー発作は狂気と紙一重の天才の徴として印象づけられる。
18. 当時は同性愛に対する指弾は厳しく、1885年に刑法が改正されて、ホモセクシュアルは有罪となった。ブラム・ストーカーの友人であり、彼の妻をめぐる闘争関係にあった Oscar Wilde がその改正刑法によって有罪にされたことは文学史上の有名な事件である。
19. 作戦計画の中身はドラキュラ伯爵が英国に送った 50 個の木の箱の行方を調べあげ、中に入っている土をすべて消毒するというものである。ドラキュラの侵入は伝染病の感染というメタファーで語られる。ドラキュラの犠牲となったミナが思わず発する「穢れている、私は穢れている」(Unclean, unclean!) という嘆きも、性的な次元での接触が忌まわしい伝染病への感染に対する恐怖とない交ぜになった言い方である。
20. 例えば、ヴァン・ヘルシング教授はスウォード医師に次のように言う。

“Ah, that wonderful Madam Mina! She has man’s brain—a brain that a man should have were he much gifted—and woman’s heart....” (p. 284)
21. ミナの額に現れた烙印にはいくつかの解釈がある。その一つはドラキュラの血に感染したミナは、ドラキュラが婚姻宣言したように、彼の花嫁であり、額の烙印はドラキュラの子を身ごもったことの記号とするものである。
22. ストーカーがホイットマンの『草の葉』を読んだのは 1868 年で、まだトリニティ・コレッジの学生だったときである（当時彼は 19 歳）。ストーカーの mentor でもあった著名なシェイクスピア学者 Edward Dowden もホイットマンの詩の支持者であり、その影響もあってストーカーはその詩に高らかに歌われている男性同士の絆に心を奪われ、すっかり心酔してしまう。周囲には同様の熱狂的な崇拜者が多数いて、当時のトリニティ・コレッジにはホイットマンの「野蛮な雄たけび」(barbaric yawp) が鳴り響いていたようである。ある晩ストーカーはホイットマンに宛てた若い熱情あふれる手紙を一气呵成

に認める。そこには自分の体つきから容貌（ストーカーが気にしていた目の上の瘤にも触れている）まで、さらに性格までも細かく伝えている。この手紙は投函されることはなかったが、ホイットマンへの崇拝は生涯変わらなかった。1884年（ストーカー37歳のとき）、彼がマネージャーを勤めていた名優 Henry Irving のアメリカ講演の際に長年の念願だったホイットマンとの面会が実現する。ダブリンに帰国後、ホイットマンに抱いた「男の中の男」(A man amongst men) という印象を『ヘンリー・アーヴィングの思い出』の中に書く。また、ストーカーが会ったときのホイットマンは、白い口ひげと顎鬚を長く伸ばしており、その様子はドラキュラの容貌にも一部投影されているようだ と Belford は言う。(Belford, pp. 39-47, pp. 165-9)

参考文献

- Andrew Smith, *Victorian Demons: Medicine, Masculinity and the Gothic at the Fin-de-Siècle* (Manchester: Manchester U. P., 2004)
- Barbara Belford, *Bram Stoker* (New York: Alfred A. Knopf, 1996)
- Bram Dijkstra, *Idols of Perversity* (Oxford U. P., 1986)
- Carol A. Senf, *Dracula: Between Tradition and Modernism* (New York: Twayne Publishers, 1998)
- Christopher Craft, “Kiss Me with Those Red Lips’: Gender and Inversion in Bram Stoker’s *Dracula*,” in *Dracula* (New Casebooks Series), ed. Glennis Byron (New York: Macmillan, 1999), 93-118.
- Cynthia Eagle Russett, *Sexual Science: Victorian Construction of Womanhood* (Harvard U. P., 1989)
- Elaine Showalter, “Syphilis, Sexuality, and the Fiction of the Fin de Siècle,” in *Reading Fin de Siècle Fictions*, ed. Lyn Pykett (Longman, 1996), 166-183.
- Eve Kosofsky Sedgwick, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* (Cambridge U. P., 1985)
- Franco Moretti, “Dracula and Capitalism,” in *Dracula* (New Casebooks Series), ed. Glennis Byron (New York: Macmillan, 1999), 43-54.
- Jasmine Yong Hal, “Solicitors Soliciting: The Dangerous Circulations of Professionalism in *Dracula*,” in *The New Nineteenth Century Feminist Readings of Underread Victorian Fiction*, ed. Barbara Leah Harman and Susan Meyer. (New York and London: Garland Publishing Inc., 1996), 97-115.
- Jeffrey F. Spear, “Gender and Sexual Dis-Ease in *Dracula*,” in *Virginal Sexuality and*

Texuality in Victorian Literature, ed. Lloyd Davis. (New York: State University of New York Press, 1993), 179-192.

Ken Gelder, *Reading the Vampire* (Routledge, 1994)

Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914* (Ithaca and London: Cornell U. P. 1990)

Phyllis A. Roth, “Suddenly Sexual Woman in Bram Stoker’s *Dracula*,” in *Literature and Psychology* 26 (1977), 113-21.

Richard Dellamora, “Homosexual Scandal and Compulsory Heterosexuality in the 1890s,” in *Reading Fin de Siècle Fictions*, ed. Lyn Pykett (Longman, 1996), 80-102.

Stephen D. Arata, “The Occidental Tourist: *Dracula* and the Anxiety of Reverse Colonisation,” in *Dracula* (New Casebooks Series), ed. Glennis Byron (New York: Macmillan, 1999), 119-144.

William Hughes and Andrew Smith (eds.), *Bram Stoker: History, Psychoanalysis and the Gothic* (Macmillan, 1998)

川本静子「世紀末の<新しい女>たち」(1)–(24)『英語青年』(1995年5月号–1997年4月号)(東京:研究社)

高山 宏「吸血鬼ドラキュラの世紀末 —— 民話と反 - 民話」『ユリイカ (特集:民話の誕生)』(1986年7月号)(東京:青土社、1986)、pp. 76-91.

竹村和子『フェミニズム』(東京:岩波書店、2000)

丹治 愛『ドラキュラの世紀末: ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』(東京:東京大学出版会、1997)

土屋恵一郎(編) 富山太佳夫(監訳)『ホモセクシュアリティ』(東京:弘文堂、1994)

富山太佳夫(編)『フェミニズム』(現代批評のプラクティス3)(東京:研究社、1995)

ミシェル・フーコー(渡辺守章訳)『性の歴史I』(知への意志)(東京:新潮社、1986)

谷内田浩正「処罰と矯正 —— 『ドラキュラ』と世紀転換期イギリスにおける女性嫌悪」富山太佳夫(編)『ディコンストラクション』(現代批評のプラクティス1)(東京:研究社、1997)、pp. 125-172.